


浄土真宗本弘寺婦人会だより

平成17年3月 第19号

鉄は金にはなれぬが
鉄には鉄にしかできない
働きがある

プロゴルファーの宮里藍ちゃんが南アフリカでの第1回ワールドカップ女子ゴルフ大会で、北田選手とベアーを組み、2人の活躍で見事優勝を果たした。引き続きオーストラリアでのレディースマスターでも最終日、惜しくも逆転されて1打差で2位に終わったが、弱冠19才である。お見事としか言いようがない。

時々ゴルフ仲間が集まると、日本女子プロゴルファーの連続賞金王に輝いている不動選手と、宮里選手とどちらが優れているかと言うことが話題になる。「不動選手は毎日8時間の練習を怠らないらしいよ!」「宮里選手は天才なのかなぁ」「藍ちゃんは明るくスター性があるけど不動選手は暗いかなぁ」話はずきない。その時私は、以前ボーイスカウトのリーダー達と「勉強嫌いのA君は100点を取ったが、懸命に努力したB君は50点しか取れなかった。どちらが人間として優れているのだろうか?」ということをし話したことが思い出された。その時私は、「結果よりもどう歩んだかと言うことが大事だから、B君の方を褒めたいと思う。」と答えたように思いますが、今思うには、どちらが優れているのかなどと比較するのではなく、どちらも立派ですと共に褒めたい、共に優れていると思うのです。そして他人の批評をするよりも、自分を批評することが大切だと思うのです。

他人のことはよく解るのですが、自分を知ると言うことは大変難しいことです。私を知ろうと自分を見つめるとき、いつも身近な人との比較の中で自分を見つめていると思うのです。そして誰かと比べて勝っていると思うと優越感に浸り、劣っていると思うと劣等感に陥ってしまうのです。これでは本当の自分が解らないのではないのでしょうか。本当に自分を知ることが出来るとすればそれは仏法を聴聞させていただき、阿弥陀如来の本願に出会えたときだと思えます。そこに「自分の力ではなかった。生かされ、許され、願われ続けている私でした。」と知らされるのでしょうか。その時点に立てたとき、自分の能力がどれだけあるのか解らないが、結果はあまり気にせず、精一杯やらせていただきますと、力強く歩いていけると思うのです。合掌

住職 高島利明

今後のお知らせと予定

日付	本弘寺	婦人会
4月8日	はなまつり 午後1時より	はなまつり 午後1時より
6月20日	永代経 午後1時より	総会
8月13~16日	お盆法要 午後1時より	お盆参拝者へのお茶接待

『読者の広場』

「太陽・貴婦人・宇宙人・半世紀の邂逅」

押し迫った年の瀬に突然かかってきた電話の主は、私が入学した、母智丘小学校の同窓のYさん、1年生のうちのわずか5~6ヶ月しか通わなかったときの友である。(当時私は宮崎県都城市横市町今房に住んでいた)半世紀経った今でもお互いの心にしっかりと思いは消えてはいなかった。その学校はすでに廃校となっている。転校後、会いたいとは思っていたが、まさか55年ぶりにその思いが叶うとはなにより嬉しいプレゼントとなった。

もう一人彼女の従姉妹のSさんを入れた3人で学校が引けてからいつもYさんの家で遊んでいた。まだ日本が貧しい時代、彼女の家に行く途中に味噌が入った大きなおむすびをおやつに貰っていた。おむすびは飛びきりのご馳走。その感激はいまだに忘れたことはない。秋の運動会后、私はその地を去り、都城市立南小学校へ転校した。彼女たちとはこの時以来会わずに50年が過ぎてしまった。Yさんいわく私のことを宇宙人という。

年が明け、ついに3人が会う当日を迎えた。Yさんは子供時代から3人の中でいつもリーダー格で面倒見が良かった。家族や知人の間にあっても中心的なまさに太陽の如く周りを照らす。大事故にあったり、大病を患っても明るい彼女だ。私は彼女をためらいなく「太陽」と呼ばせて貰う。Sさんは息子一人の物静かな貴婦人そのものである。写真1枚持たずに半世紀、3人の友情が続いていたことに不思議な気持ちと感動でいっぱいになった。Yさんが私のことを宇宙人といったことは50数年ぶりに会えたこと自体、奇跡に近く、天にも昇る、否、宇宙に行ったような興奮から言わせたことと私はしばらく興奮状態で、何も手に付かなかったことは言うまでもない。「太陽」・「貴婦人」・「宇宙人」の3人はこうして半世紀ぶりの再開が実現した。次回はお花見の約束をして家路に向かった。

児玉 和子

「がまん」

おかしを食べようとしたら いもうと二人が「食べたい。」
 ってよこどりしようとした おかあさんが
 「おにいちゃんだから、がまんしなさい。」って言って
 ぼくは、食べれなかった
 むかついた。くやしかった すごくいやだった
 本ときだって同じだ 読もうとしていると
 いもうとが、読もうとした
 それでもお母さんは 「がまんしなさい。」って言う
 ぼくは、お兄さんってつらいなと思った。

会員の石原澄江さんのお孫さん、大下りょう君
 (小学2年生)の詩です。

